二　地震動の震度の予想の手順

ア　地震動（震源由来震度）の場合

⑴　次式を満たすxを求める。

$s_0-L/2 \leqq x \leqq s_0$かつ$x \geqq 3$（km）

s_0：予想の対象とする地点から震源までの距離（km）

L：前号アに掲げる地震の規模をMとしたとき、次式を満たす量

$\log L=0.5M_W-1.85$

$M_W=M-0.171$

⑵　次式により、予想の対象とする地点におけるＳ波の最大速度振幅PGV（cm／ｓ）を求める。

$PGV=ARV_i \times PGV_{600} \times 0.9$

$\log PGV_{600}=0.58M_W+0.0038d-1.29-\log\left(x+0.0028\times 10^{0.50M_W}\right)-0.002x$

ARV_i：予想の対象とする地点における地盤増幅度

PGV_{600}：予想の対象とする地点においてＳ波の伝播速度が600m／ｓに相当する硬質地盤上における地震動の最大速度振幅（cm／ｓ）

d：前号アに掲げる震源の深さ（km）

⑶　次式により、予想の対象とする震度Iを求める。

$I=2.68+1.72\log PGV$

⑷　⑴から⑶までによる計算の方法は、次のいずれかを満たす計算の方法をもって代えることができる。

ⅰ　$ARV_i=1$としたときに、次の表の左欄に掲げる入力値をそれぞれ同表の中欄に掲げる範囲及び同表の右欄に掲げる間隔をもって入力した場合（本号の計算方法により$3.5 \leqq I \leqq 6.5$を得るものに限る。）に求められる震度I'が、$I-0.5 \leqq I' \leqq I+0.5$の範囲にあることが示されること。

入力値	範　　囲	間　隔
M	5.5～8.0	0.5
x	30km～200km	10km
d	10km～100km	10km

ⅱ　予想の対象とする地点に最も近い震度観測点における実際の震度の観測結果を基準とした場合の予想残差の平均が⑴から⑶までによる計算の方法によるもの以下となることが統計資料により示されること。

二　地震動の震度の予想の手順

ア　次式を満たすxを求める。

$s_0-L/2 \leqq x \leqq s_0$かつ$x \geqq 3$（km）

s_0：予想の対象とする地点から震源までの距離（km）

L：予報資料のうち地震の規模をMとしたとき、次式を満たす量

$\log L=0.5M_W-1.85$

$M_W=M-0.171$

イ　次式により、予想の対象とする地点におけるＳ波の最大速度振幅PGV（cm／ｓ）を求める。

$PGV=ARV_i \times PGV_{600} \times 0.9$

$\log PGV_{600}=0.58M_W+0.0038d-1.29-\log\left(x+0.0028\times 10^{0.50M_W}\right)-0.002x$

ARV_i：予想の対象とする地点における地盤増幅度

PGV_{600}：予想の対象とする地点においてＳ波の伝播速度が600m／ｓに相当する硬質地盤上における地震動の最大速度振幅（cm／ｓ）

d：予報資料のうち震源の深さ（km）

ウ　次式により、予想の対象とする震度Iを求める。

$I=2.68+1.72\log PGV$

エ　アからウまでによる計算の方法は、次のいずれかを満たす計算の方法をもって代えることができる。

⑴　$ARV_i=1$としたときに、次の表の左欄に掲げる入力値をそれぞれ同表の中欄に掲げる範囲及び同表の右欄に掲げる間隔をもって入力した場合（本号の計算方法により$3.5 \leqq I \leqq 6.5$を得るものに限る。）に求められる震度I'が、$I-0.5 \leqq I' \leqq I+0.5$の範囲にあることが示されること。

入力値	範　　囲	間　隔
M	5.5～8.0	0.5
x	30km～200km	10km
d	10km～100km	10km

⑵　予想の対象とする地点に最も近い震度観測点（気象庁の地震情報においてその震度が発表されるものに限る。）における実際の震度の観測結果を基準とした場合の予想残差の平均がアからウまでによる計算の方法によるもの以下となることが統計資料により示されること。